

# 社会的支配志向性と差別的態度をとる要因の関係性について

1160429 佐藤 雄斗

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 序論

### 1-1. 問題

人々はしばしば人種や民族など、自分とは異なる集団の人々に対して攻撃的・差別的に行動する。アメリカの人種差別や、在日朝鮮人への差別など、どうしてもときに人が外集団に対して差別行動を行うのかを明らかにすることは重要な問題である。社会的支配理論は外集団差別行動を説明する理論の一つである。そして、外集団差別行動を引き起こす個人の心理要因として、集団単位の支配関係に対する欲求である社会的支配志向性を重要視している。社会的支配志向性を用いた研究は海外において多く存在するが日本の研究は少ない。そこで、本研究では、日本人において、社会的支配志向性が差別的態度と関連するのか、また、どのような性格特性と関連するのかを検討する。

### 1-2. 社会的支配理論と社会的支配志向性

社会的支配理論とは、シダニウスとプラトローが提唱した理論である(Sidanius & Pratto, 1999)。社会的支配理論では人々の間で共有されるイデオロギーと、個人が持つ態度・欲求の働きによって社会階層が維持・変容されるメカニズムを説明している。社会的支配志向性(Social Dominance Orientation)とは、集団間の個人の態度を概念化したものである。例えば、「他のグループに比べて劣っているグループが存在する」「ある種の人たちは他の集団の人たちよりも良い扱いを受けるに値する」などの項目で測定されている。Sidaniusらの一連の研究では、社会的支配志向性が高い人ほど階層的な社会の構造を好み受け入れやすいことが示されており、階層維持メカニズムを説明する上での中心的な概念として社会的支配志向性が位置付けられている。社会的支配理論によれば、階層構造が維持されるためには、社会的支配志向性だけでなく不平等を促進する“人々に共有された集合的なイデオロギー(正当化神話)”の影響も大きい。例えば、人種主義や性差別主義などのイデオロギーがこれ

に相当する。このようなイデオロギーは、集団間の不平等に対して、道徳的で知的な正当化を与える働きをしている。

社会的支配理論の基本的な考えをまとめると、社会的支配志向性の高い者は不平等な集団間関係の維持を望み、階層の拡大を支持するイデオロギーを形成する。そして、このイデオロギーにより、その意図に沿った社会制度や組織が作られる。逆に、社会的支配志向性の低い者は、平等的な関係を望み、階層の縮小を支持するイデオロギーを形成して、このイデオロギーの意図に沿った制度や組織を作る。さらに、これらの要因は相互に影響し合っており、現在の不平等な状態を維持、強化したいという動機が原因となって、社会的支配志向性が高くなることもある。このように、社会的支配理論は不平等の維持メカニズムに対して、個人、集団、社会という、マルチレベルな相互作用の過程を提唱している点に特色がある。

### 1-4. 海外での先行研究

海外の研究においては社会的支配志向性が高いほど差別的態度が強くなることが知られている。(Sidanius & Pratto, 1999, 三船・山岸, 2011より)。

### 1-5. 日本での先行研究

三船・山岸(2011)では、社会的支配志向性尺度の日本語版を作成し、日本人において、社会的支配志向性が他のどのような心理変数と関連するのかを検討している。参加者は20代から60代までの、学生を除く女性56名、男性51名を対象として実験が実施された。参加者は新聞の折込チラシを見て実験参加に応募した。その際、現金による報酬が強調された。参加者は個別に実験室に到着後、休憩を挟みつつ、様々な心理尺度に回答した。実験時間は6時間から7時間であった。質問項目としては社会的支配志向性・共感性尺度・ファシズム尺度・警察組織に対する態度

などで、結果は、概ね先行研究の知見と一貫するものであった。尺度の信頼性係数や、警察組織に対する態度との関連、あるいは他の心理尺度との相関は、日本人に対しても社会的支配志向性尺度が有用であることを示唆している。

### 1-6. 第1研究の目的

三船・山岸（2011）では現実に存在する具体的な差別的態度との関連が示されていない。日本でも社会的支配志向性尺度が有用であることを示すには、日本における現実的な差別現象への態度との相関を示すことが必要だろう。そこで、本研究の第1研究では、現実に存在する具体的な差別的態度との関連を示すことを目的とする。本研究では現実に存在する具体的な差別的態度として、在日朝鮮人の人たちに対する差別的態度を測定することとした。在日朝鮮人に対する差別は現代の日本において身近に存在する差別だと考えてもよいだろう。近年、在日朝鮮人に対する差別的態度を測定する尺度が開発されたため（高・雨宮，2013）、これと社会的支配志向性との相関を検討する。

## 2. 第1研究

### 2-1. 方法

参加者：高知工科大学の学生91名（男48名 女38名 不明5名）

測定変数：社会的支配志向性

三船・山岸（2011）で用いられた尺度と同じ尺度を用いた。項目1～8までは「ある種の人たちは他の集団の人たちよりも良い扱いを受けるに値する」など差別的な項目となっており、項目9～16は「全ての集団が平等になればよい」などは逆転項目となっている。

測定変数：在日朝鮮人への差別的態度（高・雨宮，2013より）。

この尺度は古典的レイシズムと現代的レイシズムの2因子から在日朝鮮人への差別的態度を測定する尺度である。古典的レイシズムの項目は「在日朝鮮人は、一般的に日本人ほど知的能力に優れていない」など全6項目で構成される。現代的レイシズムの項目は「在日朝鮮人は、教育における差別の解消を求めると称し

て、不当に強い要求をしてきた」など全8項目で構成される。

手続き

2014年11月に高知工科大学の学生91名に質問紙調査を行った。質問1では、自分の同僚に対する6個の質問にどの程度反応するかを7点尺度で測定した。質問2では、自分の国の罰と報酬に対する20個の質問に自分の考えが当てはまるかを7点尺度で測定した。質問3では、在日朝鮮人への差別的態度に対する14個の質問にどの程度賛同するか7点尺度で尋ねた。質問4では、自分の周りの人たちに対する12個の質問にどの程度自分の考えが当てはまるかを7点尺度で質問した。質問5では、社会的支配志向性に対する16個の主張にどのくらい同意するか7点尺度で尋ねた。なお、本研究での分析対象となるのは質問3と質問5であり、他の項目の分析は行わなかった。

### 2-2. 結果

在日朝鮮人への差別的態度尺度の信頼性係数  $\alpha$  を算出した。古典的レイシズムの信頼性係数  $\alpha$  は0.89であった。現代的レイシズムの信頼性係数  $\alpha$  は0.46であった。また、社会的支配志向性尺度の信頼性係数  $\alpha$  は0.55であった。古典的レイシズム・現代的レイシズム・SDOとの相関を分析したところ社会的支配志向性と在日朝鮮人への差別的態度の相関は在日に対する偏見の数値が高いほど社会的支配志向性も高くなる正の相関を示した。（図1・図2・表1）

古典的レイシズム・現代的レイシズム

表1. 社会的支配志向性との相関

相関分析				
	古典的	現代的	SDO	
古典的	1.000			
現代的	.678**	1.000		
社会的支配志向性	.361**	.478**	1.000	
	** $p < .01$ , * $p < .05$ , + $p < .10$			

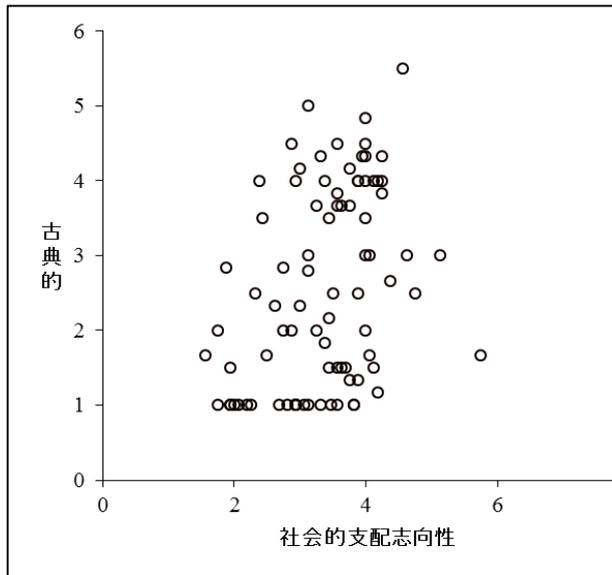


図1. 古典的レイシズムと社会的支配志向性の散布図

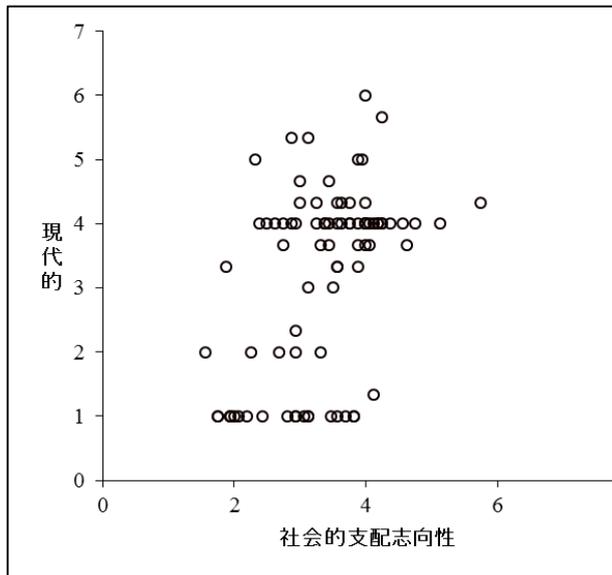


図2. 現代的レイシズムと社会的支配志向性の散布図

### 2-3. 考察

結果は概ね、海外の先行研究の知見と一貫するものであった。社会的支配志向性と在日朝鮮人への差別的態度の相関は在日に対する偏見の数値が高いほど社会的支配志向性も高くなる正の相関を示した。この結果は、日本人に対しても社会的支配志向性尺度が有用であることを示している。

## 3. 第2研究

### 3-1. 目的

研究1において社会的支配志向性が差別的態度と関連する性格特性であることが示されたが、ではその社会的支配志向性自体はどのような性格特性なのであ

うか。三船・山岸(2011)ではファシズム尺度や共感生、Big 5性格特性との相関が報告されているが、研究2ではそれら以外の性格特性との相関を検討することで、日本人の持つ社会的支配志向性の特徴を明らかにすることを目的とする。

### 3-2. 方法

3つの性格特性と社会的支配志向性の相関を調査した。具体的には、認知的熟慮性・自尊心・同調性3つの尺度を用いて社会的支配志向性との関連を検討した。

#### 測定変数：認知的熟慮性

認知的熟慮性とは、ある判断をするのにより多くの情報を収集したうえでじっくり考えて慎重に結論を下す傾向があり、物事を冷静に多面的に考える性格特性である。具体的な尺度項目は「何事もよく考えてみないと気がすまないほうだ」「何事も時間をじっくりかけて考えたいほうだ」などである。また、逆転項目として「よく考えずに行動してしまうことが多いほうだ」がある。

#### 測定変数：自尊心

自尊心とは、自分の考えは正しいと思う傾向があり、他者の考えにはあまり耳を傾けない性格特性である。具体的な尺度項目は「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い資質を持っている」などがある。また、逆転項目として「もっと自身を尊敬できるようになりたい」「自分は全くだめな人間だと思うことがある」などがある。

#### 測定変数：同調性

同調性が高いほど内集団に合致する行動や態度をとりやすくなる傾向がある。具体的な尺度項目としては「自分の意見が一致するととても安心する」「自分の主張を押し通して場を乱すくらいなら、何も言わない方が、気が楽である」などがある。また、逆転項目として「話し合いの中で、周りが意見を変えても、私は最後まで意見を変えないだろう」「グループに従うくらいなら、むしろ独立したほうがよい」などがある。

#### 測定変数：社会的支配志向性

研究1と同様、三船・山岸(2011)を用いた。手続き

2015年11月に高知工科大学の学生100名（男64名 女35名 不明1名）に質問紙調査を行った。質問1では認知的熟慮性に対する10個の質問にどの程度自分が当てはまるかを7点尺度で測定した。質問2では自尊心に対する10個の質問にどの程度自分が当てはまるかを7点尺度で測定した。質問3では同調性に対する32個の質問にどの程度自分が当てはまるかを7点尺度で測定した。質問4では社会的支配志向性に対する16個の質問にどの程度自分が当てはまるかを7点尺度で測定した。

### 3-3. 仮説

#### 認知的熟慮性に関する仮説

認知的熟慮性の高い人は、「人それぞれ、〇〇人だから××だとは限らない」と考える傾向が強い。つまり、ある特定の категорияや集団に属するからといって、その人が劣っていると考える傾向も弱いと考えられる。よって差別的態度は低くなり社会的支配志向性と負の相関を示すだろう。

#### 自尊心に関する仮説

自尊心の高い人は、自分の考えが正しいと思う傾向があり、他者の考えには耳を傾けないことがある。この傾向が他者個人に対してだけでなく、他の集団に対しても見られるのであれば、自尊心が高い人たちは他の集団の人たちを見下す可能性があるだろう。よって、自尊心は社会的支配志向性と正の相関を示すだろう。

#### 同調性に関する仮説

同調性が高いほど内集団に合致する行動や態度をとり、内集団を外集団よりもひいきする傾向があるだろう。内集団をひいきする反面、外集団に差別的態度をとるようになり、したがって、同調性は社会的支配志向性と正の相関を示すだろう。

### 3-4. 結果

分析はHADを用いた。認知的熟慮性の信頼性係数 $\alpha$ は0.85であった。次に自尊心の信頼係数 $\alpha$ は0.84であった。また同調性の信頼性係数 $\alpha$ は0.88であった。そして社会的支配志向性の信頼性係数 $\alpha$ は0.82であった。それぞれの平均値と社会的支配志向性の相関を分析してみたところ有意な相関は見られなかった（表2）。また、同調性を規範的

影響・情報的影響2つの因子に分け、その2つの因子の平均値と社会的支配志向性との相関を検討してみたところ、どちらも有意な相関は見られなかった（表3）。

表2. 平均値と社会的支配志向性との相関

相関分析	認知(平均)	自尊心(平均)	同調(平均)	SDO(平均)
認知(平均)	1.000			
自尊心(平均)	.020	1.000		
同調(平均)	-.038	-.227*	1.000	
SDO(平均)	-.067	.031	-.181+	1.000
	** $p < .01$ , * $p < .05$ , + $p < .10$			

表3. 規範的影響・情報的影響の平均値と社会的支配志向性との相関

相関分析	規範的(平均)	情報的(平均)	SDO(平均)
規範的(平均)	1.000		
情報的(平均)	.555**	1.000	
SDO(平均)	-.131	-.196+	1.000
	** $p < .01$ , * $p < .05$ , + $p < .10$		

### 3-4. 考察

第2研究では日本人における先行研究（三船・山岸, 2011）では検討されていなかった性格特性と社会的支配志向性との相関を検討した。それぞれの平均値と社会的支配志向性の相関を分析したが、有意な相関は見られなかった。また、同調性を規範的影響・情報的影響2つの因子に分けその2つの因子の平均値と社会的支配志向性がどのように相関するのかを検討してみたところどちらも有意な相関は見られなかった。

## 4. 総合考察

本研究の目的は、現実に存在する差別的態度と社会的支配志向性との関連と、様々な性格特性と社会的支配志向性との関連を調査するものであった。第1研究では、先行研究では現実に存在する具体的な差別的態度との関連がなされていないことから、在日の人たちへの差別的態度を調査した。その結果、社会的支配志向性と在日朝鮮人への差別的態度の相関は、在日に対する偏見の数値が高いほど社会的支配志向性も高くなる正の相関を示した。在日朝鮮人に対する差別的態度

との関連は、日本人に対しても社会的支配志向性尺度が有用であることを示唆する結果となった。第2研究ではさらに社会的支配志向性がどのような性格特性なのかを明らかにすることを目的に、他の性格特性との相関を分析した。しかし、第2研究で用いられた性格特性と社会的支配志向性の間には相関は見られなかった。

第2研究で相関が見られなかった理由について考察する。認知的熟慮性との相関が見られなかった理由としては、物事を多面的に考える性格特性でもそれが差別的態度や行動に関係していない可能性が考えられるだろう。自尊心との相関が見られなかった理由としては、自分の考えが絶対に正しいと思う傾向の人でも集団に属した場合には自尊心は薄れるのではないかと推測される。したがって社会的支配志向性との相関が見られなかったのではないか。同調性との相関が見られなかった理由としては、内集団をひいきはするが、他集団に対して差別的態度を取るわけではない可能性があったのではないか。したがって相関が見られなかった可能性が考えられる。

今回用いた心理尺度は社会的支配志向性と相関は見られなかったが他にも人々の性格特性を測定する心理尺度は多く存在する。今後の課題としては他に社会的支配志向性との相関する心理尺度はどのようなものがあるのかを検討し、どのような状況のときに差別的態度が現れるのかを検討していく必要があると考える。そうした研究により、現代に存在する差別問題の解決の一助となることができると考えられる。

## 5. 引用文献

三船恒裕・山岸俊男（2011）．日本における社会的支配志向性尺度の検討．日本社会心理学会第72大会，227

Sidanius, J. & Pratto, F. (1999). *Social Dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. New York: Cambridge University Press.

高 史明・雨宮有里（2013）．在日コリアンに対する古典的・現代的レイシズムについての基礎的検討．社会心理学研究，第28巻第2号，67－76

横田晋大・中西大輔（2010）．同調性志向尺度の作成．広島修大論集第51巻第2号，23－39

